

滑稽と軽み

「八木健会長の滑稽と芭蕉翁の軽み2」

2009.03.06 (聞き手 高橋素子)

高橋 それでは、前回に引き続きまして、八木健会長の俳句と芭蕉翁の句を滑稽句の作り方の上から比較検討、勉強させて戴きたいと思います。前回、とてもよく分かりましたが、復習の意味からも今少しお付き合い下さいネ。

会長 比較検討の対談は、わかりやすいと大変、好評です。ありがたいです。

高橋 それでは、今日はどの句から願しましょうか？
では、面白そうなこの句からはじめさせて戴きますね。

★ 泥棒の眠つきで見あげ熟柿

美味しそうな熟柿が木にぶら下がっていると、誰しも「ひとつ欲しいな！」と、思いますね。思わず辺りをきょろきょろ見回したりして。お腹が空いていれば尚更の事。でもそんな自分を冷静に客観的に見てみると、確かに「泥棒の眠つき」なんですね。他を風刺する川柳と違って克己的な自己風刺の俳句、面白いですね。（笑い）

自己風刺という点から芭蕉翁の句を挙げれば、

☆ 旅人とわが名呼ばれん初しぐれ

でしょうか？ご説明下さいネ。

会長 まず「初しぐれ」は、この冬最初の「しぐれ」ということで目出度いわけです。「しぐれ」には当時は陰鬱なイメージはありませんでした。

風流なものでした。旅立ちに際して初しぐれ・・・うれしいんです。しかもそういう景色の中で自身を誰かに風流な「旅人」と呼んでほしいと願っているわけで豊かな気分ですね。肯定的自己風刺ですね。

高橋 成る程、よく分かります。
では、次の句はこれにさせて下さいね。

★束に入る遅れ着きたる年賀状

俳句を詠むにあたって一番大切なことは、「季語」と「切れ」であることは以前教えて戴きましたが、この句は「束に入る」で切れていますね。芭蕉翁の「切れで強調」されている句と言えば、いろいろありますが・・・

☆この道や行人なしに秋の暮

もそうですね。

会長 「この道や」で切れているところに注目ですね。この道は芭蕉の芸道なのです。「軽み」を受け継ぐ弟子はおらん。と嘆いている。しかし、「なし」で切ると「この道を行く人はなし秋の暮」となって 弟子を非難するのが露骨になりますから あくまで この道を歩く人がない・・・と 解釈される句に仕上げています。

「切れ」で強調されますからどこで切るかで意味が異なりますね。

高橋 成る程、「切れ」の大切さが良く分かります。では次に、これが今回、一番お聞きしたいのですが、前回教えて戴いた「高悟帰俗」という芭蕉の俳諧用語と共に「不易流行」と言われる言葉がありますね。

広辞苑によれば

【「不易」は詩の基本である永遠性。「流行」はその時々の新風の体。共に風雅の誠から出るものであるから、根元においては一つである。・・・】

などと書かれていますが、今ひとつ理解に苦しみます。句を用いて具体的にご説明くださいね。

まず、会長の句を挙げさせて戴ければ、

★ スカートをめくる給水菊人形

菊花展での給水の風景ですね。菊の衣装の裾を持ち上げての水遣りは、言われてみれば確かに「スカートめくり」そのものですね。流石、面白い事を連想なさいますね。（笑い）

これに対する「不易流行」の芭蕉の句と言えば
・・・ちょっと思い付きません。教えて下さい。

会長 芭蕉の教えを弟子の服部土芳が書いた三冊子

という書物に出ています。芭蕉の句をふたつならべて説明しています。

☆ 名月に麓の霧や田のくもり・・

と言は姿不易なり。

☆ 名月の花かと見へて棉畑・・

とありしは新みなり。

つまり、いつまでも、同じような詠み方して
ちゃだめ工夫なさい。そこに新しさがでる。
「かりにも古人の涎をなむることなかれ」とも
言ってるのです。
二句めの「花かと見えて」は棉の実が弾けて白
い棉が飛び出している様子ですね・・・

高橋 流石！よく分かります。有難うございます。
では、次の句に参りますね。

★ 酒断ちの地藏の脇の酔芙蓉

お酒を断ちたいと言う願いを聞いて貰えるお地蔵さまの脇に、朝には真っ白に咲きながら夕方閉じる頃には、まるでお酒を飲んだかの様に紅くなる酔芙蓉の花が咲いている。まさに相反するものが組み合わせられた「裏切りの構成」ですね。

芭蕉翁の句を挙げるとすれば、あつ！
この有名な句がいいですね。ご説明下さいネ。

☆ 古池や蛙飛び込む水の音

会長 この句について飛び込んだ蛙の数が古くから論

議されています。

英訳する時点で困ったんですが、句の本質にかかわることです。飛び込んだあとの静寂を詠んだとする一匹説とたくさんの蛙が飛び込む賑やかさを詠んだとする説があります。

私は後者だと思っています。俳句は瞬間を詠むものですから、飛び込んだあとの静寂とするなら経過の句になります。古池の静寂を破る騒々しさ・「蛙」という季語の本意を裏切っているのです。

古来、蛙を詠むのは声を詠んだのですから・・・

高橋 成る程！そう言うことなのですね。では、次の句はどれにしましょうか？「ものから受けたひらめき」を詠まれた句という事ですから、これにさせて下さいね。

★トタン屋根光らせ薄暑製造所

これは、トタン屋根が陽光を反射している初夏の風景を詠まれた句ですね。童心で見ると確かに眩しく陽光を跳ね返しているトタン屋根こそ薄暑製造所なのだ・・・と。

芭蕉翁の句で、ものから受けたひらめきと言えば・・・

☆やがて死ぬけしきも見えず蟬の声

ということになるのでしょうか？ご説明下さいネ。

会長 「やがて」は「頓て」と書く。
しばらくして・・ではなく「すぐに」という意味
です。

騒がしく鳴いているのにたちまち死んでしまう
ようには思えない。ということで芭蕉の脳裏に
は蟬の骸が浮かんでいるのです。蟬の声から死
がひらめいたということですね。

高橋 ご説明戴くと、楽に理解出来て本当に助かりま
す。（笑い）
この調子で次の句もお願いいたします。

★ 風の兄弟長男が春一番

一番初めに吹く風が長男なら、二番は次男とい
うことになる。常識に邪魔されないで、いつま
でも持ち続けたいと言われる会長お得意の「童
心」の滑稽句ですね。

芭蕉翁の童心の句といえば・・・ありました。

☆ 君火をたけよき物見せん雪まろげ
ですね。 ご説明戴けますか？

会長 君というのは 近所に住んでいて奥の細道に同
行した「曾良」のことです。

ある雪の夜に訪ねてきた曾良に、芭蕉も嬉し
かったんです。年齢を忘れて雪遊びに興じよう
としている。雪まろげは、雪を転がして太らせ
るのですが・・雪だるまの原型みたいなもので

す。

高橋 では、次は句を詠む対象と「対話」する様な句に参りますね。会長の句で言わせて戴ければ、

あっ！これがいいですね。

★ 木枯しさん裏木戸を壊さないで

童心に返って、木枯しさんと呼びかける句ですね。素敵です！芭蕉翁の句言えば

☆ うき我をさびしがらせよかんこどり

会長 **☆ 憂きわれをさびしがらせよ秋の寺**

・・・という句が後日、この句になりましたね。掲出句は閑古鳥によびかけていますね。秋の寺より呼びかけの実体が見えてきます。世の憂う私と寂しさを共感しませんか・・・と閑古鳥に問いかけているのです。

高橋 なるほど、良く分ります。では次はこの句で、

★ 少年のゆびに撃たるる揚雲雀

少年が美しい声で鳴く雲雀を指で撃つ真似をする。これも会長が常々「滑稽の秀句は裏切りの構成にある」と言われる裏切りの句ですね。芭蕉の句で言えば・・・

これが良いですね。ご説明下さいネ。

☆ 道のべの木槿は馬に食はれけり

会長 馬上吟・・・という前書きがある句です。
当時も木槿は珍しい花木でしたから一句詠もう
としたんです。道のべの木槿・・・まで詠んだと
ころでパクリとやられてしまった。

芭蕉はその意外な展開を書いたのですが思いが
けぬ結末に裏切りのドラマがありますね。

高橋 馬に句など分りませんから、確かに面白い展開
ですね。では、もう最後になってしまいましたが、
次は、「言葉遊び」という面からこの句で・・・

★ 残る蟬爺と鳴きゐる老大樹

蟬は地中生活を約七年も続けながら、地上では
十日内外で死ぬと言われています。
きっと十日余り生き残って、この大樹で鳴いて
いたのですが、蟬は自分のことはさて置
き、大樹に向かってジー・ジー（爺、爺）と
笑って鳴いていると思うと面白いですね。

芭蕉翁の句で「言葉遊び」と言えば、

☆ この梅に牛も初音の鳴きつべし

ご説明下さいネ。

会長 天満宮に奉納する句としてつくられたものらし

いですね。

天神にゆかりのある梅と牛をとりあわせたもので、初春を寿ぎ社前の梅に鶯は初音をはりあげているが、これに誘われて社前の臥牛までも初音しようと鳴き出すに違いない。ということです。

牛も・・・として鶯を引っ込めたところが俳諧的とされています。芭蕉がまだ桃青と名乗っていた頃の作で談林派の西山宗因の座に連なった折の作と思われます。

宗因は梅翁の号。芭蕉は自身を鈍重な牛に見立てて談林への意欲を詠いあげたものです。

高橋 「八木健会長の滑稽と芭蕉翁の軽み」二回にわたるご教授でとてもよく分かりました。知識がいろいろ増えて、とても嬉しい気がします。有難うございました。

では、来月は、折角、協会報No.6・三月号に高浜虚子の滑稽句を載せて戴きましたので、虚子の句と会長の滑稽句を比較しながら滑稽句の作り方をより詳しくご教授戴きたいと思います。

またよろしくお願い致します。

会長 虚子ですから虚心坦懐にまいります。（笑い）

（2009年 3月号）